高知女子大学看護学会23年の歩み

高知女子大学看護学会会長
山　﨑　智　子

高知女子大学家政学部看護学科は平成10年４月には看護学部として独立し、念願の修士課程が発足することとなった。

高知女子大学看護学会の歴史は、そのまま看護学科の歴史と重なりながら今日を迎えている。その軌跡は山あり谷ありで、苦労は多々あったけれど苦痛と感じることはなく卒業生との一体感の中で歩を進めてきた感がする。

心もとない船出の学会ではあったが、文字通りの学会として耐えうる内容・体制を整え、再出発するまでに成長発展したことを嬉しく思う。卒業生の皆さん、とりわけ組織を動かし支えた運営委員の方々に心からの感謝を捧げたいと思う。私の役割もこれでいつでも胸を張って後続部隊に引き継ぐことができると秘かに喜んでいる。

今日に至る看護学会の足跡を振り返るにあたって、和井先生を抜きにしては語れない。和井先生の退職を目前にした、昭和50年夏頃からか、卒業生の研究発表の場が少ないし、また親睦を深める場として縦のつながりを密にする上でも、学会を発足させたいとする和井先生の意を汲み、学科内での話し合いがまとまり事はすすめられた。当時、名称を学会とするか研究会とするかで私は大いに悩んだ覚えがある。学会というには内容が果たしてついて行けるのかというのが最大の悩みであったが、しかし和井先生は学会で行きたいと言われるのであった。様々な問題を含みながらも、ともかく学会として発足したということは今にして思えば、先見性に富んだ決断であったとも言えようか。学会という名称によって努力目標が明確化されたといってもいいのかもしれない。

和井先生の退職を記念して、学会を発足させるべく呼びかけの原案を書きあげたところでクレームがついた。退職の記念ではなく現職中の仕事としてやりたいと言われるのであった。３月退職を目前に、私は大いに面喰らいながらも時間的余裕もなく、また、意外な方向に事が進展するのを懸念して、早急に進めねばならぬと思い定め、科内皆々と力を合わせ何とか無事発会にこぎ着けたのであった。

昭和51年１月15日、快晴の成人式の日に学会は発足した。南国土佐といえども１月はまだ寒さも厳しく、会場の203番教室の暖をとるには苦労した。前日から全国各地から参集した卒業生の手助けによって、会場は整えられ当日の太陽の恵みを得て無事船出となった。昭和50年度卒業生総数376名中160名の会員、そのうち60余名の出席者によって、14題の研

究発表も粛々と進められ、会議室での昼食会や正面玄関脇の枯池での記念撮影の場面が何故か脳裡に焼きついている。そして、懇親会の夕も無事終えたことであった。

当面の課題は、毎年の開催日をいつにするか、研究発表演題の確保と運営方針等であったと思う。開催日については、学内の行事との兼ね合いもあり色々と揺れ動いたが、卒業生が里帰りする都合を考え、よさこい祭りに合わせた日程が第４回から定着し、第21回まで続けられた。その後、大学の学期制の導入とともに第22回から７月に移動し今日に至っている。

しばらくは演題の確保に苦労した。個々人への電話攻勢は続けられ最近ようやくその仕事から私は解放されている。学会の運営については学内の卒業生が中心にならざるを得ない時代が続いた。科内の人数は７名を上回ることはなく、毎年の完全開催は負担も大きいところから、強の年、弱の年と一年毎に一日の講演会と二日間の研究発表とシンポジウム等の組み合わせとして実施してきた。講演会については、地域への還元を考え第７回から看護職の方々に開放している。

一方、昭和57年度の一年間は看護学科設置30周年記念事業を展開したが、その一つの事業として「お年寄りとともに健康な生活を」をテーマに５回シリーズのセミナーを開催した。この講座は評判もよく、継続希望も出されたことから、単発で終わらせるには如何にも心残りであるとの声に押され、学会の事業として位置づけ継続することとし、昭和60年まで続けられた。その後、一般人対象の公開講座は県や市をはじめとして事業所などでも開催されるところが出現したこともあって、平成３年から看護職の方々を対象として、看護の質の向上に貢献することが、ニードに応えしかも有効ではないかとの結論に到達した。講師役は勿論、運営委員が担当し、理論と実践をつなぐをテーマに開催された。しかし、時を同じくして、大学自体にも公開講座が求められる時代に入り、大学の行事として看護学科も応えねばならぬこととなった。学会でも大学でもということは一人二役のメンバーとしては耐えきれぬということとなり、平成４年からその主体を大学に移し、学会は共催ということで落ちつき今日に至っている。年々の講座は希望者も多く、また熱心な受講者に支えられ、担当者もなかなか大変な様子ではあるが、ある種の充足感を味わいつつ継続させている。

発足以来、運営委員は総て手弁当で参加し、少しでもゆとりが出ると基金にまわし積み立ててきた。基金は学会で購入した物品や書類を置く場所もないところから、将来、機会があれば学会の拠点となる場が欲しいと夢みての積み立てでもあった。寄付として寄せられたものも入っている。

学会活動が軌道にのった昭和62年頃から、運営委員への旅費を実費支給することが可能

となってきた。また、講師に対する謝金や旅費も徐々に実費に近づけることができるようになっている。

平成10年4月から発足する修士課程の学生に対する奨学金制度を学会の事業として発足させることについて検討がなされ、第23回の総会において承認された。僅かな基金で自転車操業の感は否めないが、勉学者に対して支援しようとの思いがまとまり制度が発足することとなった。原資となる基金については、卒業生の皆さんへの寄付の呼びかけを同時に行い、早速、ご協力いただきつつある現状である。また、かつて小林先生からも基金の呼び水になればといただいていたものも投入することができることとなった。私も退職時に皆さん方から頂戴したご芳志の一端を何らかの形で役立てることができればと考えていたので、丁度よい機会であると考えている。とすると計画当初のギリギリの自転車操業も若干緩和されるのではないかと期待している。そして、この事業が次第に拡大し、人材育成のために貢献できるとすれば意義あることであろう。

第23回の総会において、もう一つ、卒業生のみの学会から、卒業生以外の方々への参加に門戸を開くことが承認された。高知県の看護界の質的向上に貢献することとなれば喜ばしいことであるし、そのことを願ってもいる。

また、従来の学会集録を学会誌として再編し、文字通りの学会誌として耐えられる形に衣がえすることとなり、本誌がその第一号となる。

23年間にわたる学会の歩みは看護学科の歴史45年間と重なりつつ、地道に歩み続けてきた。そして看護学科は社会の動きの中とはいえ、満を持す形で看護学部として独立し、院設置と長年の夢が実現した。池地区への移転、新校舎建設と再出発にふさわしい条件が整えられたと思う。卒業生総数918名、学会員数571名という叡知が集められている。平成13年からは卒業生の数も倍増する。当然、学会員数も増えることであろう。また、教員数も25名となった。4年制看護大学の発祥の地、高知から全国に向けて新知見を含めた様々な新しい提案の発信基地として、大いなる飛躍を期待している。そのためにも高知女子大学看護学会は健全で活発な学会活動が続けられなければならないと思っている。そして、きっとそれらに応えられる学会として発展するに違いないと確信している。